

4-07 終末期がん患者に対して人生を振り返り 余暇活動を用いることで活動性が向上した一例

○馬杉 歩美(OT), 北田 穂並(OT), 池田 勝彦(OT)

地方独立行政法人 市立吹田市民病院 リハビリテーション科

Key word : 生きがい, 意味のある作業, 末期がん

【はじめに】今回、S状結腸癌に対しBSCの方針となり、周りに迷惑を掛けることへの苦痛や、自律の喪失を感じていたために活動性が低下していた症例を担当した。写真を用いてこれまでの人生を肯定的に振り返ることと物作りに焦点を当て介入を行ったことで活動性の向上を認めため報告する。尚、今回の報告にあたり本人に口頭で同意を得ている。

【症例紹介】症例は80歳代女性。5年前にS状結腸がんに対して切除術施行。その後、多発転移しBSCの方針となった。今回がん性疼痛コントロール不良のため当院入院となる。長男家族との4人暮らしで旅行や洋裁で服を作ること、毎日自宅の庭に並べたプランターで植物を育てることを生きがいにしていた。入院後よりレスキュー使用するもNRS7点で、日中臥床傾向から活動性が低下していた。それにより病棟では「あの世に行った方が良かった」「周りに迷惑をかけている」と発言があり、周りに迷惑をかけていることの苦痛から外泊の提案にも拒否していた。第27病日よりOT開始となった。

【OT評価】介入開始時所見はPS3、FIM86点で運動機能は比較的維持できており歩行は可能であったが院内移動は車いすを使用しADLは見守りや準備が必要であった。疼痛はNRS5点で入院時より軽減していたが、「自分ではなにもできない」と消極的になり活動性に変化はなかった。介入時は質問に対する返答のみであったが、趣味の話には関心が高く自発的な発話が増えていく中で植物や旅行の写真を持ってきていたとの情報を入手した。

【介入方法】疼痛が軽減するも自律性が低下していることに対し、自己の存在を確認するための手段として持参された写真を用いて関わり、これまでの人生を思い出し肯定的に捉えることで自分の人生を再認識し、今後の活力を生み出す効果があるとされているライフレビューを実施した。また、気分転換や達成経験を得

て自己効力感を引き出すために、症例と相談の上、得意だった縫物に類似しているメタリックヤーンを選択し写真の額を制作して病室に飾ることを目標とした。

【経過と結果】介入当初は表情が暗く受け身的であった。写真を見ながら趣味の話を共有し傾聴することから開始した。さらにライフレビューを行っていくと自己肯定ができるようになった。そこで自己効力感を引き出すために写真の額の制作を開始した。完成すると「私でもこんな物が作れる」と達成感と自信に繋がり成功体験が得られた。がん性疼痛はNRS5点と変化はなかったが「リハビリの時間は痛みを忘れる」との発言があり、前向な発言や笑顔が増加し他者との交流が増えた。それに伴い、ベッド周囲のADLを上げ、さらに病棟と連携し院内ADL獲得を図ったところ自主的にリハ室まで歩いて来たり売店へ行ったりと院内での活動性が向上した。その後、外泊を実施し症例が育ててきた植物を見に行くこともできた。退院時、PS1、FIM106点となり第54病日に緩和ケア病棟に転院となった。

【考察】本症例では存在価値を再構築するために写真を用いてライフレビューを行うことと自信をつけるために物作りに焦点を当て介入を行った。写真は過去を視覚的に捉えることができ想起しやすいため、これまでの人生を肯定するための手段として有効であったと考える。さらに自己効力感を引き出すために過去経験した余暇活動に類似したやや複雑で創作的な物作りを行ったことで自信を得ることに繋がった。この介入を通して、終末期のがん患者に対して「自己の在り方」を取り戻していく手段に余暇的な作業活動を提供することが重要であると考えられる。